

## J. S. バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈 ——第4番 ニ短調 BWV 790——

藤 本 逸 子

### はじめに

この小論に先立ち、「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』<sup>1)</sup>の楽曲分析と演奏解釈」<sup>2)</sup>と題し、「第1番 ハ長調 BWV 772<sup>3)</sup>」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S. バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ハ長調 BWV 787」から「第3番 ニ長調 BWV 789」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第21号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたつて、「三声シンフォニア」の「第4番 ニ短調 BWV 790」を取り上げたものである。

### 楽曲分析と演奏解釈

「W.F. バッハのための小曲集」<sup>4)</sup>において、この「Sinfonia 4」にあたるのは、50番目の曲で、「Fantasia 2」(BWV 790)と題されている。双方には、表Iに示したような若干の違いが見られる。「Fantasia 2」の[10]<sup>5)</sup>上声2拍～3拍めのB音<sup>6)</sup>上にタイがないのは、単なるつけ忘れと思われる。

- 
- 1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈 藤本逸子1985年（以下「第2号」における小論）」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
  - 2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「」に入れて表す。
  - 3) BWV=Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ.S. バッハ作品総目録番号。
  - 4) 「W.F. バッハのための小曲集」については、「第2号」における小論の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
  - 5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表す。例、第4小節め→[4]、第3小節めから第10小節め→[3]～[10]。
  - 6) 音名は、原則としてドイツ音名で表す。例、変ロ音→B音、嬰ヘ音→Fis音。

表 I 「Sinfonia 4」と「Fantasia 2」の相違箇所

Sinfonia 4	Fantasia 2
② 上声4拍め Gis音 A音	② 上声4拍め Gis音 Fis音 Gis音
④ 中声4拍め Cis音上に ♪	④ 中声4拍め Cis音上に装飾記号なし
⑩ 上声2拍め～3拍め B音上にタイ	⑩ 上声2拍め～3拍め B音上にタイなし

### 楽 曲 分 析 (譜<sup>17)</sup> 参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部 ①～⑬ (12.5)

前 半

主 題 ①～② (1)  
 主 題 ②～③ (1)  
 間 奏 1 ③ (1)  
 主 題 ④～⑤ (1)  
 間 奏 2 ⑤ (1)  
 主 題 ⑥～⑦ (1)  
 間 奏 3 ⑦ (1)  
 カデンツ ⑧ (0.5)

後 半

主 題 ⑧～⑨ (1)  
 主 題 ⑨～⑩ (1)  
 間 奏 4 ⑩～⑪ (1.5)  
 主 題 ⑫～⑬ (1)  
 カデンツ ⑬ (0.5)

第2部 ⑬～⑳ (10.5)

前 半

主 題 ⑬～⑭ (1)  
 主 題 ⑭～⑮ (1)  
 主 題 ⑮～⑯ (1)  
 主 題 ⑯～⑰ (1)  
 主 題 ⑰～⑱ (1)  
 間 奏 5 ⑱～⑲ (1)  
 カデンツ ⑲ (0.5)

後 半 (コーダ)

主 題 ⑳～㉑ (1.5)  
 主 題 ㉑～㉒ (1)  
 カデンツ ㉒～㉓ (1.5)

### 各部分における楽曲分析

第1部

前 半

主 題

①～②・①～②上声部に、十六分休符の後、主題 (T) が現われる。(T) は、十六分音符で刺繍音的動きをする要素 (a) と八分音符で跳躍上行する要素 (b) からできている。これらの要素は、(a<sub>1</sub>) (b<sub>1</sub>) (a<sub>2</sub>) (b<sub>2</sub>) と並び、(T) をなしている。(a<sub>1</sub>)

7) この小論における「Sinfonia 3」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext(Bärenreiter-Verlag, Kassel 1972)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

から (b<sub>1</sub>) へは、4度跳躍下行している。(b<sub>1</sub>) 内は、6度跳躍上行している。(b<sub>1</sub>) と (a<sub>2</sub>) のある拍は、タイで結ばれ (T) のリズム的特徴であるシンコペーションをなしている。(a<sub>2</sub>) から (b<sub>2</sub>) へは、5度跳躍下行している。(b<sub>2</sub>) 内は、7度跳躍上行している。(b<sub>2</sub>) も (T) 最後の十六分音符の動きにタイでつながり、シンコペーションをなすことで、(T) を女性終止させている。

- (a) と (b) の連結時の跳躍下行の音程、および (b) 内の跳躍上行の音程は、上記の音程が基本となるものの、和声や転調により、変化して出現する。
- [1]～[2] 中声部は、休止している。
- [1]～[2] 下声部は、経過音を含むものの主調 d moll<sup>8)</sup> の I<sup>9)</sup> V I の和音を八分音符で奏で、しっかり和声的に支えている。この順次上行する3度の動きを要素(c)とする。

### 主 題

- [2]～[3] • [2]～[3] 上声部は、(c) の反行形を凝縮した動き (○/) の後、A音で音を止め、a mollへの転調を明確にしている。続いて (a) で中声部の (T) にそい、カデンツの動きを経て、[3] で a moll 主音の A 音に入る。
- [2]～[3] 中声部は、(T) を a moll で奏でている。
- [2]～[3] 下声部は、上声部 [2] 1拍めの (○/) の動きを1オクターブ下で受けるかのように、[2] 2拍めに (○/) を置いている。[2] 3拍め～[3] 1拍めの動きは、a moll のカデンツ (K) のバスの動きをしている。

### 間奏 1

- [3] • [3] 上声部は、四分音符と (a) が交互に置かれている。(a) から四分音符への連結は、4度跳躍上行している。4度跳躍下行する (T) における (a<sub>1</sub>) から (b<sub>1</sub>) への連結の反行した動きとなっている。
- [3] 中声部は、(a) と四分音符が交互に置かれ、上声部と掛け合いになっている。
- [3] 下声部は、休止している。
- [3] この間に、a moll から、d moll に、戻っている。

### 主 題

- [4]～[5] • [4]～[5] 上声部は、(c) の逆行形のリズム的拡大をした (c←×) に (a) がつながっている。この動きの中で、d moll の I を響かせている。
- [4]～[5] 中声部は、(○/) の後、d moll の旋律短音階構成音にそって [5] 頭の主音 D 音へ順次上行している。
- [4]～[5] 下声部は、(T) である。[1]～[2] 上声部と同じ d moll の (T) を2オクターブ下で奏でている。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太字は長調、小文字は短調を表す。例、ハ長調→C dur あるいはC;、イ短調→a moll あるいはa;。

9) 和音記号の和音の度数は、大きい字体のローマ数字(音度記号)で表し、和音の形体は、アラビア数字(形体指数)で表す。例 一度の和音→I、属七の和音→V<sub>7</sub>。

## 間奏2

- 5
- ・ 5上声部は、間奏1 3に、似た動きをしている。ただし、(a) から四分音符の連結は、4度と5度の跳躍下行となっている。
- ・ 5中声部も、5上声部同様、間奏1 3に、似た動きをしており、(a) から四分音符の連結は、5度の跳躍下行となっている。間奏2も、間奏1同様、上声部と中声部で掛け合いになっている。
- ・ 5下声部は、(o/) と四分音符が交互に置かれ、リズム的には、中声部にそい、上声部と掛け合いになっている。
- ・ 5の間、d mollからF durに転調している。

## 主 題

- 6～7
- ・ 6～7上声部は、四分音符、(c) がリズム的に凝縮した (c/)、四分音符、(o/) と並んでいる。
- ・ 6～7中声部は、(a) の変形した (a')、四分音符、(o/)、(o/) と並んでいる。6 3拍めまでは、上声部と掛け合いになっているが、4拍めは、上声部も中声部も (o/) を同時に鳴らし、両声で6度の音程を保ちながら順次下行している。
- ・ 6～7下声部は、F durで、(T) を奏でている。ただし、F dur下中音から、(T) が始まっているので、(a<sub>1</sub>) から (b<sub>1</sub>) へは5度跳躍下行、(b<sub>1</sub>) 内は7度跳躍上行、(a<sub>2</sub>) から (b<sub>2</sub>) へは3度跳躍下行と、跳躍音程が変化している。(b<sub>2</sub>) 内は、7度跳躍上行で、変化していない。

## 間奏3・カデンツ

- 7～8
- ・ 7～8上声部は、F durの属音を二分音符で長く鳴らした後、(a) を4回置き、F durの上中音に入って、第1部の前半を終えている。
- ・ 7～8中声部は、(a) の後、F durの主音を長く3拍伸ばし、導音からF durの主音へ納まると思いきや十六分休符に入り、第1部の前半を終えている。
- ・ 7～8下声部は、(a) の後、F dur主音から、短7度跳躍上行し、以下、順次下行して、F durの (K) と続き、第1部の前半を終えている。

## 後 半

## 主 題

- 8～9
- ・ 8～9上声部は、休符とタイによるシンコペーションのリズムで、中声部の (T) の動きにそって6度上で、2度順次下行する短い動きをしている。
- ・ 8～9中声部は、F durの主音から始まる (T) である。
- ・ 8～9下声部は、1下声部と同じ動きをF durで行っている。
- 9～10
- ・ 9～10上声部は、8～9中声部同様、F durの主音から始まる (T) を、8～9中声部の (T) の1オクターブ上で奏でている。この (T) が、本曲最高音域の (T) である。
- ・ 9～10中声部は、8～9上声部と同じ動きを、8～9上声部と同じ高さで行っている。9～10上声部の (T) の動きに3度下で、そうかたちになっている。

- ・ [9]～[10]下声部は、[8]～[9]下声部と同じ事を1オクターブ上で行っている。

#### 間奏4

- [10]～[11]・ [10]～[11]上声部は、[10]では、主題の終止音のF dur上中音をタイでそのまま長く伸ばし、[11]では、間奏1の中声部のように、(a) と四分音符を交互に置いている。ただし、3拍めは (a') である。
- ・ [10]～[11]中声部は、[10]では、F durの主音を伸ばした後に (o/) を置き、[11]では、間奏1の上声部のように、四分音符と (a) を交互に置いている。ただし、2拍めは (a') の反行形 (e) である。
- ・ [10]～[11]下声部は、(a) と (b) の組合せを2度下行するかたちで、3回ゼクエントしている。(a) と (b) は5度跳躍下行してつながり、(b) 内は8度跳躍上行している。
- ・ [10]～[11]の間で、F durからd moll、さらにa mollへと転調している。

#### 主題・カデンツ

- [12]～[13]・ [12]～[13]上声部は、a mollの属音から始まる (T) である。(a<sub>1</sub>) から (b<sub>1</sub>) へは5度跳躍下行、(b<sub>1</sub>) 内は4度跳躍上行、(b<sub>2</sub>) 内は4度跳躍上行と、跳躍音程が変化している。(a<sub>2</sub>) から (b<sub>2</sub>) へは、5度跳躍下行で変化していない。主題に第1部を終了させるカデンツが続くが、導音を巡る刺繍音的動きの後、主音を鳴らさず十六分休符に入る。その終止の仕方は、[8]の第1部前半の終わりの中声部に似ている。
- ・ [12]～[13]中声部は、[12]頭で、半音上行してa mollの主音A音に行き、そこから[13]2拍めa mollの上主音H音まで、八分音符と四分音符の組み合わせのリズムにのって、半音階で一気に下行し、3拍めでa mollの主音A音に納まり、第1部を終えている。
- ・ [12]～[13]下声部は、2度順次下行する八分音符と (a)、2度順次上行する八分音符と (a) の組合せで動いた後、a mollのカデンツに入り、主音A音を鳴らして第1部を終えている。

## 第2部

### 前半

#### 主題

- [13]～[14]・ [13]～[14]上声部は、[1]～[2]上声部と同じ (T) を、a mollで鳴らしている。
- ・ [13]～[14]中声部は、[1]～[2]中声部と同じように休止している。
- ・ [13]～[14]下声部は、[1]～[2]下声部と同じ (c) を、a mollで鳴らしている。

#### 主題

- [14]～[15]・ [14]～[15]上声部は、a mollからg mollへの急激な転調を助けるように短2度下行と短2度上行を行っている。
- ・ [14]～[15]中声部は、a moll属音から始まりg moll上中音に終わる (T) を置いて

いる。(T)の中で急激な転調を行っているので、(a<sub>1</sub>)から(b<sub>1</sub>)へは5度跳躍下行、(b<sub>1</sub>)内は7度跳躍上行、(a<sub>2</sub>)から(b<sub>2</sub>)へは3度跳躍下行と、6～7下声部の(T)と同じように跳躍音程が変化している。(b<sub>2</sub>)内は、これも、6～7下声部の(T)と同じように、7度跳躍上行で変化していない。

- ・14～15下声部は、a moll主音に(a)を続け、15に入って、g moll属音から主音まで、音階構成音で順次下行し、g mollを確立している。

#### 主 題

- 15～16・15～16上声部は、g moll主音を豊かに響かせた後、(a')の逆行形の反行形( $\flat\leftarrow$ )を置き、g moll導音から主音へ納まっている。
- ・15～16中声部は、(a)(a)と置き、g moll下中音を響かせた後、(a')の反行形( $\flat$ )を経てg moll属音に至っている。
- ・15～16下声部には、g moll主音から始まる安定した(T)がある。

#### 主 題

- 16～17・16～17上声部は、g moll属音から始まりF dur上中音に終わる(T)を置いている。14～15中声部同様、(T)の中で急激な転調を行っているので、(a<sub>1</sub>)から(b<sub>1</sub>)へは5度跳躍下行、(b<sub>1</sub>)内は7度跳躍上行、(a<sub>2</sub>)から(b<sub>2</sub>)へは3度跳躍下行と、14～15中声部の(T)と同じように跳躍音程が変化している。(b<sub>2</sub>)内は、これも、14～15中声部の(T)と同じように、7度跳躍上行で変化していない。
- ・16～17中声部は、休止している。
- ・16～17下声部は、(a)に続いてF durの属音から十六分音符が音階構成音で順次下行し、17に入って(c)を置き、F durの主音に納まっている。

#### 主 題

- 17～18・17～18上声部は、(a')に続いてF durの上中音から十六分音符が音階構成音で順次下行し、F durの下中音に停まり、d mollに転調する準備をしてから、(♭/)を経てd mollの導音にとどまる。
- ・17～18中声部は、F dur主音から始まる安定した出だしであるが、後半、d mollへの転調のため、(a<sub>2</sub>)から(b<sub>2</sub>)へは6度跳躍下行、(b<sub>2</sub>)内が6度跳躍上行と変化した(T)がある。
- ・17～18下声部は、八分休符の後、F durの主音を鳴らし、(c)の反行形(♭)を置いている。

#### 間奏5・カデンツ

- 18～19・18～19上声部は、d mollの導音に(a')の逆行の反行形( $\flat\leftarrow$ )が続き、d mollの下中音を響かせた後、(a')(a)が、カデンツの上に乗る、d mollの上中音に納まり第2部の前半を終えている。
- ・18～19中声部は、(a)(b)(a')(♭/)(c)と連なり上主音で係留し、d mollの属音につながり第2部の前半を終えている。19中声部の1～2拍めの(a')(♭/)は、

19 上声部の3～4拍めの (a') (♩/) と掛け合いになっている。

- 18～19 下声部は、18 に (♩) を置き、19 では (a') の反行形のリズム的に拡大された (♩×) と (c) でカデンツをなし、d mollの主音に納まり第2部の前半を終えている。

#### コーダ

##### 主題

- 20～21 • 20～21 上声部は、(a) の後、d mollの下中音から主音まで半音階で上行している。リズム的变化はあるものの12 中声部の反行をしている。
- 20～21 中声部は、d mollの主音に (a) (♩/) が続き、21 でg mollに急激に転調して、(a) につながっている。
- 20～21 下声部は、20 のd mollの主音から始まる安定した (T) の後、21 でg mollに急激に転調し、(a) に続いて、1 オクターブ下で中声部の音をリズム的に変化させて (♩) のかたちで追いかけている。

##### 主題・カデンツ

- 21～23 • 21～23 上声部は、途中、g mollの (T) の上を通りながらも、d mollの主音から1オクターブ下の主音まで、半音階で下行している。同様の動きは、12 の中声部にも見られる。行き着いたd mollの主音で全曲を閉じている。
- 21～23 中声部は、g mollの主音から始まる (T) を置くが、最後の (b<sub>2</sub>) 内を4度と跳躍上行音程を変化させてd mollに戻り、(a) (b) (a) (a) と続けて、おだやかにd mollの主音に納まり全曲を終えている。
- 21～23 下声部は、(a) (a) (♩/) が並び、カデンツの中に (a) を入れてd mollの属音に進み、最後はd mollの主音で曲を閉じている。

## 演奏解釈 (譜2参照)

## テンポ

テンポに関して、諸校訂版<sup>10)</sup>は、表IIのような指示をしている。

表II 諸校訂版における「Sinfonia 4」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bischoff	Andante mesto ♩ = 56
Ferruccio Busoni	Andante con moto
Alfredo Casella	Andante cantabile
S.A. Durand	Andante mesto
James Friskin	Poco adagio ♩ = 56
Vilém Kurz	Andante mesto
Wm. Mason	Andante
G.E. Moroni	Allegretto moderato ♩ = 84
Bruno Mugellini	Andante con moto ♩ = 63
Julius Rötgen	Andante ♩ = 66
井口 基成	Andante
千倉 八郎	Andante ♩ = 60

また、内外10人の演奏時間は、表IIIのとおりである。

表III 諸演奏家における「Sinfonia 4」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	2' 16"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	2' 13"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	3' 17"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	2' 45"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	2' 05"
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	2' 04"
田村 宏	不明	ピアノ	1' 46"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1' 50"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1' 47"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	2' 03"

いずれの演奏も「速さ」を楽しむものはない。「Sinfonia 4」もチッコリーニ・シフ・高橋らが装飾音符を加えて演奏している。特に高橋は多くの装飾音を華やかに用いている。このテンポならば装飾音も美しく効果的である。グールドとニコラエワの演奏は、かなりゆったりしたテンポであるが、装飾音を加えることなく、曲の骨幹をシンプルに提示した演

10) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。



奏をしている。シフの演奏は、愛しみを込めたもので、「Sinfonia 4」が、あたかも彼の恋人であるかのように聞こえ、心惹かれる。レオンハルトの演奏は、タイがあまりにも強調されており、驚かされた。ギルバートの演奏も少しその傾向があるので、チェンバロという楽器の特性かとも思われるが、ヴァルハは、そのような表現をしていない。

筆者は、「Andante ♩=60」という少し遅めのAndanteをとる。校訂版には、*mesto*の表示も数あるが、悲しみよりはむしろ骨太な表現を楽しみたい。よって、装飾音を加えることはしない。

### アーティキュレーション

十六分音符はレガートとし、八分音符等の十六分音符より長い音符はノンレガートとする。タイの後は、続けず切って奏する。

### 装飾音

筆者は、装飾音の必要を感じない。

### 各部分における演奏解釈

- ①～③・*P*で、始める。この*P*は、悲しみの*P*ではなく、深さを感じる*P*である。
  - ①上声部 (T) は、下声部の動きに乗って、十六分音符のレガートと八分音符のノンレガートによるアーティキュレーションの違いと、タイによるシンコペーションのリズムを生かし堂々と奏す。
  - ②上声部は、音の上行する動きに従って③頭のA音に向けて*cresc.*する。②中声部 (T) も、上声部にそって*cresc.*する。②下声部は、カデンツの動きで上の2声をしっかり支える。
  - ③上声部と中声部は、掛け合いを楽しみながら、音の下行にそって少し*dim.*する。
- ④～⑧・④下声部の (T) の特性を生かすように、太い絃や太い管をイメージして、*P*より音量を増して*mP*とする。④中声部の十六分音符は、④下声部の (T) と掛け合うようにし、(T) にそって少し*cresc.*する。④上声部は、下2声の上にオブリガートのように乗る。
  - ⑤3声の掛け合いを楽しみながら、ほんの少々*dim.*する。
  - ⑥下声部の (T) と一緒になって、上2声も掛け合いながら、⑦頭に向けて*cresc.*する。
  - ⑦～⑧は、下声部の八分音符の下行する動きを美しく鳴らし、それにそって、*dim.*しながらカデンツに入り、第1部の前半を銜いなく終える。
- ⑧～⑬・第1部の後半は、*mf*で始める。少しエネルギーに朗々と奏したい。
  - ⑧～⑨中声部の (T) を*cresc.*する。それに続くように、⑨～⑩上声部の (T)

- も、全曲最大のクライマックスである[10]2拍めB音に向けて *cresc.* する。[8]～[10]下声部の (c) は、それらの (T) をしっかり支えながら、同じように *cresc.* する。
- [10]～[11]の間奏4は、掛け合いながら、盛り上がったエネルギーを少し消化していくように、*dim.* する。
  - [12]～[13]は、上声部の (T) を意識しながらも、中声部の下行する半音階を美しく響かせ、それにそいながら *dim.* し、カデンツに入って第1部を静かに終わる。
- [13]～[16]・第2部は、仕切直しのように改めて、*mf* で始める。
- [13]～[14]上声部は、上声部としては低い中音域の (T) であることを生かし、重みのある *mf* とする。[13]～[14]下声部 (c) は、[13]～[14]上声部の (T) を支え豊かに響かせる。
  - [14]～[15]は、中声部の (T) が転調のため不安定になっていることを、朗々と歌わずに *mp* で悩んでいるような音にすることによって表現したい。
  - [15]～[16]は、*mf* にもどる。[14]～[15]とうってかわって、下声部にある (T) を晴々と歌い、上2声も掛け合いを楽しみながら美しく歌う。
- [16]～[19]・[16]～[17]は、上声部に悩みの (T) がある。第2部は、悩みのエネルギーでクライマックスなる。3声とも[17]2拍めB音に向けて *cresc.* する。
- [17]～[18]は、中声部に悩みを克服した喜びの (T) がある。上声部は、中声部 (T) と掛け合いを楽しみながらエネルギーを消化し、*dim.* して間奏5に入っていく。下声部は、安定した八分音符の動きで上2声を支え、これも *dim.* して間奏5に入っていく。
  - [19]は、間奏5に続くカデンツで、第2部のクライマックスのエネルギーを消化した後、穏やかに、第2部の前半を終わる。
- [20]～[23]・コーダは、少し元気の良い *mp* で始める。
- [20]は、下声部の安定した (T) を豊かに歌い、上声部の上行する半音階を美しく響かせる。中声部は、上下2声と連携をとって、3声で *cresc.* していく。
  - [21]～[22]は、中声部の (T) を意識しながら、上声部の下行する半音階を美しく歌う。下声部の十六分音符は、上声部の半音階の動きにそい、3声全体で *dim.* しながらカデンツに向かう。
  - [22]～[23]カデンツは、少しテンポをゆるめて、[21]から続く上声部の下行する半音階にそって、3声ともなお *dim.* し、穏やかに全ての声部がD音に納まり、静かに、しかし、堂々と曲を閉じる。
  - 最後の終止音は、主音のみである。したがって、弾き方によってはピカルディの三度にも聞こえる。堂々と終わるが、決して元気が良すぎないように注意し、あくまで、短三和音を感じるように終止する。

## おわりに

「Sinfonia 4」は、演奏者によって様々な魅力を引き出せる曲である。シフのように、あくまでナイーブで繊細な美しさを求めることもできるし、ニコラエワのように、シンプルで決然とした美しさを求めることもできる。筆者は、悩みにうち勝つ勇壮な表現をとったが、しなやかな愛おしい表現にも惹かれている。年を経た後、同じ曲で全く違う演奏解釈をするのも楽しいことであろう。

譜1 「Sinfonia 4」 BWV 780 [1]~[23] (楽曲分析)

第1部

主題

主題

The musical score consists of five systems of piano accompaniment, each with a treble and bass clef staff. The key signature is one flat (B-flat major or D minor). The time signature is 3/4. The score is annotated with various musical symbols and letters:

- System 1 (Measures 1-2):** Labeled '1' and '主題'. Treble clef has notes with 'a' and 'b' below them. Bass clef has notes with 'c' below them. A 'T' is placed above the first measure. A 'd:→a:' is written below the first measure. A 'K' is written below the second measure.
- System 2 (Measures 3-4):** Labeled '3' and '間奏1'. Treble clef has notes with 'a' below them. Bass clef has notes with 'a' below them. A 'T' is placed above the first measure. An 'a:→d:' is written below the first measure.
- System 3 (Measures 5-6):** Labeled '5' and '間奏2'. Treble clef has notes with 'a' below them. Bass clef has notes with 'a' below them. A 'd:→F:' is written below the first measure.
- System 4 (Measures 7-8):** Labeled '7' and '間奏3'. Treble clef has notes with 'a' below them. Bass clef has notes with 'a' below them. An 'F:' is written below the first measure.
- System 5 (Measures 9-10):** Labeled '9' and '間奏4'. Treble clef has notes with 'a' and 'b' below them. Bass clef has notes with 'c' below them. An 'F:' is written below the first measure.

Other annotations include 'T' (trill), 'a', 'b', 'c', 'c←x', and 'K' (crescendo) placed throughout the score to indicate specific musical techniques and dynamics.

11

主題 T

F:→d:→a:

13

第2部 主題 T

a:→g:

K c

15

主題 T

g:→F:

T

17

間奏5

F:→d:

T

19

コーダ 主題

d:

♯x c K

21

d:→g:→d:

T K

## 譜2 「Sinfonia 4」 BWV 780 〔1〕～〔23〕 (演奏解釈)

Andante

〔1〕

*p*

〔3〕

*mp* (∞)

〔5〕

〔7〕

*dim.* *mf* *cresc.*

〔9〕

全曲最大のクライマックス

11

dim.

13

mf mp

15

mf cresc.

17

第2部クライマックス

dim.

19

mp

21

dim.

少しテンポをゆるめる

## 参考文献・参考楽譜・参考CD

## \*参考文献

- 市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)  
 山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

## \*参考楽譜

## 原典版

- Johann Sebastian Bach 「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1979)  
 Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)  
 BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1972)  
 J.S. BACH 「Inventionen Sinfonien」 Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)  
 BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext (C.F. Peters coporation, Frankfurt 1933)  
 J.S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K.G., Wien 1973)  
 バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 原典版 角倉一朗校訂 (カワイ出版 1983)  
 バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 原典版 長岡敏夫編 (音楽之友社 1965)

## 校訂版

- J.S. BACH 「15 SYMPHONIEN」 Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)  
 BACH 「TOW- and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)  
 J.S. BACH 「Dreistimme Inventionen」 Ferruccio Busoni (Breitkopf & Härtel Weisbaden)  
 BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」 Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)  
 J.S. BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」 Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)  
 J.S. BACH 「Three-Part Inventions」 James Friskin (J. Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)  
 JOH. SEB. BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」 Alfred Kreutz (B. Schott's Sohnen Mainz 1950)  
 BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TRÍHLASÉ SINFONIE」 Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)  
 BACH 「Three-Part Inventions」 WM. Mason (G. Schirmer Inc New York 1967)  
 BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」 G.E. Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)  
 BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」 Bruno Mugellini (Ricordi 1983)  
 JOH. SEB. BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)  
 バッハ 「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」 バッハ集4 井口基成 (春秋社 1983)  
 バッハ 「インヴェンション」 (音楽之友社 1955)  
 バッハ 「インヴェンション」 全音楽譜出版社出版部編 (全音楽譜出版社)  
 バッハ 「インヴェンション&シンフォニア」 ピアノ指導講座7 千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)  
 バッハ 「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」 千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)  
 J.S. バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 Hans Bischoff 角倉一朗訳 (全音楽譜出版社 1972)

## \*参考CD

- Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S. BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)  
 Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)  
 Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)  
 Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079



(VICTOR)

Andárs Schiff (Piano) 1985 「J.S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村 宏 (Piano) 1989 「J.S. バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113

(ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG

VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J.S. バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部

のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第22号  
2005 (平成17年) 抜刷

J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈  
——第4番 ニ短調 BWV 790——

藤 本 逸 子

An Analysis and Interpretation of J. S. Bach's "Die dreistimmige Sinfonien"  
—Sinfonia 4 d moll BWV 790—

Itsuko FUJIMOTO

豊橋創造大学短期大学部